

37 「教育」の要諦は、「ティーチング」か？それとも「コーチング」か？!

堂本 彰夫

(1) 「体験 VS. 知識」→「二項対立」のドグマ(教条?)から解放されない?教育(学校)の苦悩?!

戦後、「米国教育使節団の報告」の影響(直接的関与?)もあってか、教育(学校)の世界では、まずは、いわゆる「経験主義(学習)」(J. デューイの教育思想)が謳歌された。しかし、その方針は、徐々に改められ(這いまわる「経験主義」!)、もう一つの「系統主義(学習)」が導入された!そして、その後は、詳しいことは省くが(ただし、実際は、ほとんど忘れてしまっている?)、学校での教育方針は、件の双方の学習方法を両極にして、あたかも「時計の振り子」のように振幅してきたとも言える(否、そう言われてきた!)。前者が、まさに「体験」を、そして後者が、「知識(の体系)」を重視するものであるが、その正否はともかく(冷静に言うと、双方には、それぞれの利点・欠点がある!)、ここで注目したいことは、その双方が、期せずして?交互に主張されてきたということである(もちろん、そこでの、各々のキャッチフレーズやキーワードは、それぞれ異なるが!それらは、その時々々の社会状況を反映していた?)。

しかるに、その度重なる往還は、あくまでも偶然の結果なのか?それとも、その行き過ぎを是正しようとする?、ある観念が介在しての、ある意味必然の結果なのか?単純に捉えれば、どんな状況にあっても、どちらの要素も重要だということを暗示しているということにもなるが、ここで注視したいのは、それが、いわゆる「二項対立」の状態、交互に主張されてきたのではないかということである!すなわち、そこには、「どちらかにしなければいけない(その時点では、こちらの方が正しい!)」というような、ある種の「ドグマ(教条?)」があり、そこから、なかなか抜け出し切れない?教育(学校)の苦悩があったのではないかということである(今もある?)?!それはそれで、ある意味仕方がないのかもしれないが、そのしわ寄せ(ツケ?)として、最前線ではあるが、末端でもある現場では、その都度、その振幅に右往左往させられるということであり、ようやく慣れてきたところに、次なる(一応は新たな?)対応が求められるという、ある種の悪循環が形成されてきたということである?!

要は、その対応(変化)に苦慮しながらも、自らが納得し、周囲の理解と協力も得られるものであったならば、それはそれでよかったのかもしれないが、実際は、そうではなかった(多くは不整合や混乱を起こし、結果的には、全体の、そして個々の負担(感)は増し、挙句の果てには、彼らは、それに押し潰されてしまった?→疲れ果てた休職者や離職者の増大!)?!そこが問題であったということであるが、改めて、そうした状況は、何も現場の教職員のせい(意欲の減退やライフスタイルの変化等)ではない!明らかなのは、現実に膨れ上がってきた、様々な大きな社会的な期待(課題)には、最早単独では応えられないということであり(制度疲労を越えた、それこそ限界?)、そのための有効な施策やシステムが求められているにも拘らず、なかなかそれがうまく実現していないということである(こうした中で、件の「働き方改革」が唱えられているわけでもある!)

例えば、現在、SDGsという形で、全世界的な社会の課題目標が提示されているが、その実現に向けて、学校(教育)が、それにどのように関わって(変わって)いけばよいのか、そこが問われているわけであるが、それ以前に、他ならぬ、その学校が(社会教育もそうであるが!)、そうした課題目標を全面に受けて、鋭意立ち向かっていけるのかどうか?実際は、かなり厳しいと言わざるを得ない!しかも、そこには、例の「学歴社会(受験戦争)」の弊害も現存しており(妖怪化している?)、一方の、理解や協力を得るべき親や地域の実情も、なかなか芳しくない(悪化しているところが断然多い?)?!「コミュニティスクール」や地域学校協働活動と言う名の「地域学校協働本部事業」等が導入されているが(本来は、双方を含めて「地域学校協働活動」と呼びたいが!)、最も喫緊の課題である、かの「いじめ」「不登校」等の減少(本当は、解消と言いたいところだが!)には至っていない?!そんな中、再び?「コーチング」の意義や可能性が唱えられている!

(2) 今、「コーチング」の意義や可能性が唱えられている?!そこには、何がある?

そこで、今突然、ここで何故「コーチング」のことを持ち出すのかであるが、一つは、甚だ軽薄?ではあるが、現在放送中の、あるテレビ番組が、結構話題を呼んでおり、そこで提示されているキーワードの一つが、まさに「コーチング」とされているからであり、もう一つは、その方法論によって、上で述べた、我が国の教育(学校)が苦悩してきた「体験」と「知識」の、言わば「二項対立」的な状況から、何とか脱却出来るのではないかと思えるからである!それは、当然、ここで言い続けている「教育協働」の意義と可能性に関わるものであり、なかなか進まなかった、これまでの「学校教育」と「社会教育」の連携・協力(学社融合→地域学校協働活動)の足踏み状態(限界?)を突破するものと考えられるからである?!蛇足ながら、それは、学校教育関係者

への、決して余分ではない連携・協力の意義と可能性（成果）を実感させるものとなると考えるからでもある（少なくとも、それがなかったから、なかなかうまくいかなかった？しかも、それが、目の下の「働き方改革」によって、誤導させられてもいる？）？！

すなわち、「コーチング」には、他者（指導者）の存在が前提としてあるが、その支援（誘導？）は、あくまでも、その本人（学習者）の自発性や自律性に委ねられるということである！ただし、多少通俗的ではあるが、これまでの「コーチング」のイメージは、いわゆる「スポーツ」の世界のそれであり、良くも悪しくも、その内実は、極めて多種多様なものとなっている！端的に言えば、良い指導者（コーチ）もいれば、あまり良くない指導者（コーチ）も、半ば混然一体となって存在しているということであるが、そこで大切なのは（ある意味勝敗を抜きにして？）、その指導者（コーチ）と選手（子ども達）の間の信頼関係であることは言うまでもない（もちろん、その信頼関係が、どのようにして生まれているのかということが問われるわけであるが！）？！

それはともかく、ここで述べたいことは、先に述べた「体験」と「知識」の融合の問題であり、そこにある「ドグマ（教条）」からの脱却の問題である！何故なら、そこにある大切なものを見失わないということであるが（どちらも大切であるということ！）、それを、どうやって実現（体感）させるかである！一方に偏るのではなく、その双方をうまく実現（体感）させる方法はないかということであるが、偶々出会ったのが（ひょっとしたら必然？）、「コーチング」という方法論であったわけである（これは、究極的には、「経験主義」と「系統主義」の融合に結びつく?!）！

(3)「二人三脚」の限界と落とし穴?!「教えない」ではなく、「どうやって教える」のかである！

遅くなったが、前出のテレビドラマとは、TBSの日曜劇場「御上先生」のことである！だが、ここでは、その具体的な紹介はしない（「文部科学省の官僚が学校の先生をやる」という特殊な設定で、ドラマ展開的にも興味深い！そして、見ようによっては、単なる「エンタメ」を越えている?!）！ここで取り上げたいことは、現在、教育界（学校）で話題となっている、そして番組でも決めゼリフとなっている「教えない→考えて！」という、まさに、そのことに関わる部分である。ただし、これは、最初から一方的に答えを与えないということであって、決して教えないということではない！現に、御上先生は、「personal is political（個人的なことは政治的なことである）」とか、「バタフライエフェクト（効果）」とか、様々なことを教えている！

ところで、「教育」は、「知育」「徳育」「体育」という、三つの要素からなるが、どの要素にも、それらは関係している。そして、そこにおいて、一方的な教える（ティーチング）ではなく、様々な回路を通じた多面的な教えるを、私は、「コーチング」としたいのである（「アクティブラーニング」とは、ある意味これかもしれない?!）！ただし、ここが大切であるが、「様々な回路を通じた多面的な教える」とは、多くの人の意見や情報を得てということであるが、それは、一方的な「ティーチング」の部分も含むということである！自らの自主性・自発性あるいは興味・関心によって学ぶということと、誰かの力を借りて、あるいは他者と協力し合って学ぶことの双方が必要ということであり、そうした「学び」の全体を、誰かが、責任をもって見守り（自らが教えるという部分もあってよい!）、望ましい場所（未来）に導いていく！それが、「コーチング」であり、「教育」というものでもあると言いたいのである（要は、その双方は、不可分だということである!）。

現在、PBL（problem - based learning 問題解決型学習→探求型学習）が大きく唱導されているが、そこに、こうした視点（哲学?）が深く根付いているかどうか？とかく、これまでは、「コーチング」と言えば、スポーツの世界のことだと思われてきたが、これからは、「教育」のすべてにおいて、こうした方法が重要となるわけである！しかも、それは、単なる「二人三脚」ではなく、言わば「多人多脚」のそれであるということである！換言すれば、あらゆる「教育」の力で、それを押し進めていくということである！そして、学校には、その「メインコーチ」が必要となるということである！何故なら、特定の「二人三脚」だけであれば、片方が崩れれば、それで御仕舞である！スポーツの世界でも、その弊害は、数多く散見される（もちろん、その逆もある!）？！ただ、多くの人（ICTの力も含めた!）の参画を経た「コーチング」、そして、それを傍で見守る「メインコーチ」がいれば、そうした喜悲劇も、まったく違った様相となる?!

それが、学校の、地域（親や社会教育）との連携、ICT活用の意義であり、可能性なのである（それを厄介な仕事、余分なお荷物と捉えていた学校が、真に変わる契機ともなるということである!）?!最後に、ある登場人物（女性教師）が、「子ども達が変わる！それが、私の喜びであり、やりがいである！」というようなことを言っていた！まさにそれが、「メインコーチ」としての教師なのであり、決して機械（AI）が真似できない部分である！だが、それは、閉じられた関係の中でのものではなく、多くの「コーチング」との遭遇によって生まれるものであれば、さらに望ましいものとなるということである（現実には厳しいが?!）！（つづく）